

野間宏「暗い絵」と《第三の途》

—戦中日記にみる無意識の罪責感

尾西康充

1 「学生評論」

「学生評論」は一九三六年五月に創刊される。三三年の滝川事件以降反動化していた大学当局に対し、京都帝国大学の学生は非合法グループを結成し、非合法新聞「自治会ニュース」を発行して抵抗していた。しかし三四年九月二〇日自治会メンバーが一斉検挙される。これを契機に戦術を合法舞台に転換し、文化部の予算増額要求などの学友会改革運動の一環として、各学部に専門別研究会が設けられた。出身高校別の代表者会議が確立され、全学的に普及する雑誌を求める声が高まる。永島孝雄や藤谷敏雄、関原利夫、姉齒仁郎、西田勲たちの奔走によって、「単に京大のみの学内雑誌にとどめず、全関西さらに全日本の学生の自主的総合雑誌」を標榜する「学生評論」が誕生したのである。この雑誌にかかわった小野義彦によれば、「学生評論」は「押よせるファッショ化の波に抗して智識と文化と自由をまもるため広汎な学生や智識層を結合することを使命」に

していたという^①。反戦反ファシズムの方針を掲げた雑誌ではあったのだが、第八号（一九三七年四月）巻頭言には、つぎのような表現がある。

吾々にして、若しも真にファシズムを防遏せんと欲する者であるならば、最早それに対して徒に反撥するような態度をとるべきでないことは、明らかであらう。反つて、それを真に克服するの道は、会々その内に語られている所の、真理の片鱗を吾が物と爲し、之を逆捨的に、(ad hominem)用いることの側にあらねばならないのだ。古い自由主義者や、また旧套依然たる左翼公式主義者流に、吾々は敢てこのことを言ふ。——時代の欲求に対して、もつと敏感であれ！ 汲々として絶えず自己を掘り下げよ！ 時代の後方から前方に向つて遠吠えする様な愚は、最早止められねばならない。

「逆捨的に (ad hominem)」という言葉は、普段使わない表現

である。ラテン語の〈ad hominem〉の意味は、「議論または反応の）支持する立場よりもむしろ人に向けられる」（『オックスフォード事典』）である。言い換えれば、「意見の内容に反論するのではなく、それを主張した人の個性や信念を攻撃するという論点すり替えの論法」を指すとされる。

ここでは言葉の厳密な意味よりも巻頭言が意味するもの——「左翼公式主義」はいうまでもなく、たとえ合法的な「自由主義」であっても、現今のファシズムに対しては「徒に反撥するような態度をとるべきでない」という悲痛な叫び——に耳を傾けることが必要であろう。三五年に美濃部達吉の天皇機関説が不当に排撃されたとき、もはや法理論上の解釈が問われることはなく、個人主義や自由主義、民主主義など、機関説の立脚する世界観が《国体》に反するものと論断された。「絶対主義の下における合理主義・民主主義の最後の合法的拠点であった機関説にさえ有罪を宣告することができたならば、あとは雑草をなぎ払うほどの困難もない」という言論弾圧の危機が到来していたのである。²⁾

日中戦争勃発後の三七年八月一三日、京都府警特高課は、文学雑誌「リアル」の同人四名を検挙した。治安当局による恣意的な解釈を可能にした治安維持法の目的遂行罪が最初に適用された事件となつて、これによって「進歩的運動は合法運動の形態をもつてしては遂行することを、ほとんど不可能にさせられた」のである。この後「世界文化」をはじめ「土曜日」「同志

社派」「学生評論」など進歩的文化運動を目指す京都の雑誌関係者が続けて検挙された事件は、「京都人民戦線派事件」と呼ばれている。

野間宏の『暗い絵』（『黄蜂』第一〜三号、一九四六年四、八、一〇月）は、野間が京都帝国大学文学部仏文科に在籍した一九三五年から三八年までの間、さらに限定すれば三七年一月中旬が作中時間である。三八年六月二四日に『学生評論』の主要メンバーである永島や藤谷、姉齒を含む六名が検挙され、彼らとは別に布施杜夫が日本共産主義者団との関係から三八年九月に検挙される。

『暗い絵』の視点人物である深見進介は、レーニン『何をなすべきか』を信奉する永杉英作、木山省吾、羽山純一のグループに対して、「やはり俺の来るべき処、俺の居るべき処はこの他にはない」と感じる。しかしそこに落ち着くことができず、「自己完成の追究の道をこの日本に打ち立てる」こと以外に「生きる道はない」と思う。深見はそれを「科学的な操作による自己完成の追究の努力の堆積」と呼ぶ。永杉たちの道を「仕方のない正しさ」だと認めつつも、「やはり俺の道はここから離れている。」と考えざるを得ないのであった。

このような深見の思考をふまえ、本多秋五は『暗い絵』の主題を《自己完成の努力の肯定》とした。それは「社会的責任のまっただなかで、共産主義の学説を学んだ青年知識人が、内外ともに最悪の日に、背教者にも殉教者にもならぬ新しい道——

あるか無きかのその新しい道の探求に通じるもの」であったと論じられた。⁴⁾

野間が往時を回想した『暗い絵』の背景——人民戦線ノート（『学生評論』第四号、一九五〇年二月）によれば、彼は党再建を目標とする永島や布施たちのグループではなく、「労働者の人民戦線の側」に立っていた。『真理の片鱗を吾が物と為し』ながら「逆捻的に用いる」という葛藤を抱えて生きるのか、あるいは眼前の隘路を切り開いて「背教者にも殉教者にもならぬ新しい道」を進むのか——。絶望的な状況におかれた青年知識人の苦悩をたどりながら、『暗い絵』に投影された無意識の罪責感を検討してみよう。

2 生産力理論と《第三の途》

「軍法会議とその後」（『新日本文学』第一巻第九号、一九五六年九月）によれば、野間は一九四〇年には「私が思想的に動揺していた」のだが、翌四一年には「その動揺からぬけ出てきていた」という。川崎造船所の切削工で日本労働組合全国評議会（全評）に属していた矢野笹雄は、野間の小学校以来の友人であった旋盤工の羽山善治とともに、神戸人民戦線グループのリーダーとして活躍していた。矢野は三六年一月五日検挙され、懲役三年の求刑を受けて大阪刑務所に服役する。四〇年四月出獄し資本論研究会に参加するが九月阪神党再建グループの一員として

検挙される。一月釈放された後、四一年五月下旬、矢野が野間や羽山との連絡を回復して大阪に移住、「尖锐なる党的活動の展開を主張」した。それに対して、野間と羽山は「其の危険性を指摘し、『戦時社会政策の推進』『合法場面に於ける活動』『巧妙に擬装せる文化運動』の範囲に止むべき事を説得」した。それから三名は「風早八十二、窪川鶴次郎、岩上順一、相川春喜等の著作をテキストに研究会をもった」とされる（『特高月報』昭和十八年六月分）。

一九三〇年代後半から四〇年代前半にかけて、マルクス経済学者風早八十二と大河内一男による生産力理論は、思想弾圧を受けて自由を奪われていた左派知識人たちにとって、それまでとは異なる方法で社会変革を試みようとする社会政策理論であった。その一方、新体制運動を中心とする総力戦体制への参画を前提としていたために、左派知識人の転向を正当化し、翼賛体制を支える理論にマルクス主義社会科学を変質させたとの批判が戦後になって加えられた。思想の科学研究会による共同研究『転向』では、自由主義者の転向として採り上げられた。鶴見俊輔によれば、生産力理論が盛んに論じられた翼賛体制の時代は、「国民的規模における、なしくずし集団転向の時代」で、「各人各様の生活歴にふさわしい独自の擬装転向の形態」が産み出されていたとされる。⁶⁾

風早や大河内の唱えた生産力理論とは、利潤率の維持を目的とする総資本の論理に従って、生産力を伸展させるために必要

な社会構造の合理的改造を進めるものであった。戦争完遂のためには、労働者を精神主義的に叱咤するのではなく、彼らの労働条件を向上させることが必要であると主張は、マルキシズムの言論が封殺された時代において、マルキシズムに代わる新たな政治批判の手法とされた。総力戦体制下、生産力の観点から政府の非合理性を批判するという理論であったが、それは同時に「マルクス主義者の擬装抵抗の方式」（高島通敏、あるいは「マルクス主義の転向形態としての生産力理論」（栗原幸夫）でもあった。⁷⁷

風早によれば、日本共産党が壊滅した後のコミニストの運動は（党を再建する）、あるいは（合法的左翼政党に依拠する）、〈新たな情勢に適応した革新的な運動を形成する〉という三つのグループに分類できるとされる。風早自身はその三番目のグループ、すなわち生産力の発展を阻害している前資本主義的な劣悪な労働条件を改革し、個別的企業内での労働者の自主性を回復させる立場に属した。風早の『労働の理論と政策』（一九三八年一〇月、時潮社）では、当時一般に膾炙されるようになった「第三の途」という風早独特の主張が展開される。

折しも、世界史的な日支事変は勃発し、対内的にも強力統制経済の体制が見る／＼樹立された。労働及び農民戦線にも大なる異変があつた。多くのインテリゲンツィヤは不意を打たれ、この新事態に対処する術を知らず、或る者は

自己を官僚機構の構成分子に転化し、又多くのものには単に拱手傍観した。然し、第三の途はないものであらうか。戦線の勇士と同じ決意に立つとき、インテリゲンツィヤは国民の有力な批判的要素としてのその独自の積極的な役割を持つことも可能ではなからうか。時局に内在する諸矛盾を科学の照明にかけ、困難な時局に巨大な前進を約束することは出来ないものであらうか。⁷⁸

知識人にとって、日中戦争勃発という「新事態」に対処する「第三の途」とは何か。風早によれば、労働者が組合を解消して産業報国会に集結し、大政翼賛会運動のなかで自主性を獲得する手助けをすることである。国民の諸階層の意向を體現した「国民的世話役」を「国民的自主組織への産婆役たるもの」として設け、この「国民的世話役」が中心となった「指導的国民組織」を組織することによって産業報国運動の転換を図るのだという。だが高島通敏が指摘したように、「国民的世話役」とは「オルグ」に、「指導的国民組織」とは「統一戦線委員会」に読み換えられるとともに、風早が要請する「国民的指導政党」とは「近衛新党」に置き換えられるものであった。すなわち風早の主張は、反ファッショ人民戦線戦術とも翼賛運動の理論とも解釈可能な「擬装転向の理論」であつたのである。その両義的な意味合いは、つぎのような主張に顕著にみられる。

固より産業報国会運動自体を過大に評価することは、その無視もしくは過小評価に準じて正しくない。この運動はあくまで官僚、半官僚の大衆獲得運動の一つの形態である。すなわち大衆獲得のための官僚的形態であるに過ぎない。したがって、かくの如き形態を従業員大衆の自発性取得の契機として擱むことは、木に抛つて魚を求むるに等しく、形式論理から云つてそれ自体矛盾を含んでゐることを承知しておかねばならない。だが、木に抛つて魚を求めることを知るもののみが、この矛盾を突破しうるのである。

ここにみられるのは、官製あるいは半官製の「大衆獲得運動」を「従業員大衆の自発性取得の契機」に転用できるとする詭弁である。

だが実は、かつてのマルクス主義経済学者風早が翼賛運動の渦のなかに身を投じていったのと同じプロセスが、人民戦線グループに共感を示していた野間宏にもみられるのである。中村福治によれば、野間の立場は「風早八十二の生産力理論の亜流的形態」であつたという。

野間らは人民戦線運動敗北後の困難な中、運動再建の手がかりがつかめない状況下に、経済更生会こそが人民戦線の組織であると考え、それが皇民運動、日本建設協会と結合し、それらの国家主義団体の活動の一環に組み込まれ、

高度国防国家を部落で支える機関に「上昇転化」してもなおかつ人民戦線の形態であると思ひこんでいるのである。¹⁰⁾

中村は、野間もまた「両義性」を抱えていたと指摘する。そのことは「思想をこの日本の歴史と現実のなかで自立的に生かそうとするかぎり、その場はつねに両義的であり、そこでの思想の担い手の選択は、けつして論理だけで決定されるものではない」とする栗原幸夫氏の主張にも通じる。¹¹⁾ 栗原氏によれば、「抵抗のための擬装が、なぜ積極的な協力になつてしまつたのか」という問題は、たんに生産力理論だけではなく、戦争中すべの擬装転向者がつき当たらなければならない問題であつた¹²⁾という。

3 「統一戦線とファシスト大衆組織」

野間は関根弘との間で戦わされた「狼が来た論争」（一九五四年）——「インテリゲンチヤの間に騒ぎを起すだけでは社会全体の危機意識を高めることにはならない」という関根の発言をめぐる一連の論争——を通じてみずから「戦争中の自分の誤り」を明らかにしている。「気で病む狼——関根弘にこたえる——」（『文学界』第一〇巻第三号、一九五六年三月）のなかで、野間はそれをつぎのように説明している。

それは私が昭和十五年夏頃から昭和十六年春頃まで、転向者が中心になつてつくつた右翼団体に参加していたという事実で、そして当時コンミニスト・グループの友人と人民戦線派の友人から批判と忠告を受けていたという事実である。

ここで野間が言及しているのは、日本建設協会大阪支部に野間が参加していたことであつた。日本建設協会は、団体精神の下に協同主義社会建設を目指して国内改革を実現しようという日本国体研究所から転向者グループが分離して、一九四〇年二月に設立された。この協会には、全国水平社から分裂して「部落厚生皇民運動」をはじめた松田喜一、野崎清二、朝田善之助、北原泰作などの〈転向左翼〉が参加していた。野間によれば、日本建設協会に参加したことについて、「もちろん私はこの誤りの姿をひろく明らかにしようとして、以前から小説を計画していたが、ついに今日まで実現することが出来ていない。私はむしろそれをひきのばしさえしているのだ」という。戦争協力をここで認めたのかと思いきや、関根が野間の発言に言及すると、すぐに野間は「狼は消えたープラグマチスト・関根弘批判」〔文学界〕第一〇巻第五号、一九五六年五月）を執筆し、「私は転向して右翼団体に参加したなどというものは全くない。当時私が右翼団体に参加した誤りというのは組織的な誤りなのである」と反論した。野間によれば、「コンミニスト・グループの友人の

批判というのは私がそのような団体に参加するとすれば、その団体内にフラクションをつくらなければならないということだつた」という。

野間は「転向して右翼団体に参加」したのかどうか。この問題を考えるにあたって、一九三五年八月のコミンテルン第七回大会がそれまでのセクト的極左方針から転換して人民戦線戦術を採択したことに留意しておく必要がある。反戦反ファシズムを訴えたゲルルギ・デIMITロフの報告は、遅くとも一九三六年春には、在米共産主義グループによって邦訳され、コンサイス紙質の薄い紙に印刷されたものが海員グループによって輸入され、神戸の書店金星社に届けられていたとされる。コミンテルンの方針転換に沿って、日本における人民戦線戦術の展開を指導した野坂参三と山本懸蔵の「日本の共産主義者への手紙」も三六年二月に発表されていた。コミンテルン第七回大会では、デIMITロフは「統一戦線とファシスト大衆組織」について、つぎのように報告している。

ファシズムは、労働者から彼ら自身の合法組織を奪いさつた。ファシズムは、彼らにファシスト組織をおしつけ、大衆はやむをえず、あるいは一部は自発的にそのなかに入っている。ファシズムのこの大衆組織は、そこでわれわれが大衆とまじわるわれわれの合法的または半合法的な活動舞台でありうるし、またそうでなければならぬ。それ

らの組織は、われわれにとつて、大衆の日常的利益をまもるための合法的または半合法的な出発点となりうるし、またならなければならない。これらの可能性を利用するために、共産主義者は、大衆との結びつきを目的として、ファシスト大衆組織内の選挙制のポストを手に入れるようにつとめなければならぬ。そのさい、そうしたたぐいの活動は革命的労働者にふさわしくない、沽券にかかわるなどという偏見は、さらりとすてざるべきである。

たとえば、ドイツにはいわゆる「工場世話役」の制度がある。だが、われわれがこれらの組織でファシストにポストの独占をゆるさなければならぬいわれがどこにあるう？

(中略)

同志諸君、諸君はトロイア攻略の昔話をおぼえておられるであろう。トロイアは、難攻不落の城壁で攻撃軍をよせつけなかった。そしてすでにすくなからぬ犠牲をはらっていた攻撃軍は、有名なトロイアの木馬をつかつて敵の心臓部に侵入するまでは、勝利を得ることができなかった。

われわれ革命的労働者は、首切人の人垣をきずいて人民をふせいでいるわれわれの敵ファシストにたいしても、同じような戦術をもちいることを遠慮する必要はない、と私は思う。¹⁴

デイミトロフによれば、共産主義者は「ファシスト大衆組織」に入り込み、選挙によって任命されるポスト、たとえば「工場世話役」——風早の「国民的世話役」を連想させる——を積極的に手に入れなければならない。共産主義運動が非法化された状況下、「革命的労働者」には「トロイの木馬」のような擬装戦法が求められるというのである。

野間はその当時、自分が参加していた右翼運動について布施杜生に意見を求める機会があった。布施は三八年九月京大ケルン関係者とともに治安維持法違反の容疑で検挙され、四〇年七月執行猶予判決を受けて出獄していた。布施は野間の相談に対して「それはいけない、それはあやまつている」と批判し、「できるだけ早くそこから出るように」と忠告した。しかしつぎに会ったときには、布施はすっかり意見を変え、偽装転向して出獄していたことを打ち明けて、自分も右翼組織に入れてほしいと告げる。野間は、このような布施の態度の急変の背景には、「上部団体の決定」があることを直観した。しかし布施は四二年九月再逮捕され、翌四三年二月京都拘留所内の独房で獄死してしまふ。戦後になって野間は「あの時布施杜生をこちらに引取つて、私たちの中に入れてもいいにしても、私たちの近くにとどまれるようにしていたならば、結局逮捕されるにしろ、逮捕時期はずっとあとになり、あるいは生き残ることも可能だったのではないかとまことに残念な気がした」と回想することになる。¹⁵

偽装転向と右翼組織への加入とは、活動家を生き延びさせるだ

けでなく、対立する陣営に潜入する戦術として認められていたことが分かる。

4 自己矛盾と《穴》のイメージ

一九四〇年八月に開催された部落厚生皇民運動の第一回全国会議に、野間宏は浪速区経済更生会中堅幹部養成講習会講師という肩書で、来賓として出席している。部落皇民運動とは何か。野崎清二編『部落厚生皇民運動の実践指針』（一九四〇年六月）の冒頭には、部落厚生皇民運動全国協議会準備会による「宣言」がおかれている。この「宣言」によれば、日中戦争勃発という「未曾有」の「国家的危機を克服して聖戦目的を完遂」するためには、「日本国民が真に国体精神を体得し、国民生活のあらゆる領域に於ける一切の反国体的矛盾を克服して力強き拳国一致の新しい国家体制を樹立しなければならない」。振り返ってみれば、従来の部落解放運動には「その精神と方法に決定的誤謬」があった。「所謂部落問題の解決」は「従来の自由主義的乃至階級主義的運動によつて招来されるものではなく又政治的経済的諸矛盾を累増せしめつつある資本主義的体制の埒内に於ては望み得べくもない」。「部落民」の「真の解放」とは「人格の独立と尊厳とを基調とする国民一体化の実現であり、それは日本国体の尊厳そのもの、中に、国体精神の昂揚と国民生活の協同体的建設の中に、実現されることを明確に識らねばならな

い」という。

だが、この表現にも詭弁がみられる。「拳国一致」体制を確立するには「一切の反国体的矛盾」を克服しなければならぬというのだが、それまで自分たちが全国水平社に所属していたにもかかわらず、国民対立の原因が「報復的糾弾」を基本方針としている全国水平社にあると非難し、「国民一体化」のためには水平社を解消しなければならないとするのである。しかし彼らの主張とは逆に、軍隊組織内での差別は絶えることなく存在し、「部落民」の戦時動員を加速させるだけの結果になってしまうのであった。

ところで戦後になって、民主主義を標榜する文学者たちに戦争協力の過去があったことを吉本隆明や武井昭夫が激しく追及した。彼らと歩調を合わせるように、桶谷秀昭は『暗い絵』を批判して「なぜ野間宏は、戦後、戦争中の自己を対象化し、てきけつする出発点に立ったときに、エゴの醜悪にたえるという作業を、現実の曇りない直視からはじめなかつたのか」と指摘した。桶谷によれば、「戦後文学にない手たちが、戦時下の革命運動と転向、また兵営や野戦で体験した人間の醜悪さを、どれだけ自己を社会的現実や限界状況に疎外せずに凝視しえたかの度合」が重要なのであって、野間が「深見進介の漠とした人民戦線思想の内部の検討をおこたり、おのれのエゴイズムを自己の存在の底部にまで掘りすすめようとしなかつた」と厳しく批判したのである。¹⁷⁾

他方、作品構造の観点から『暗い絵』における野間の「隠蔽」を非難したのは、小澤勝美氏であった。

しかし、最後の場面で深見進介の「仕方のない正しさ」を「しゃんとさせる決意」の表明は、かつて私が感動を以て読んだことを今日撤回しなければならぬほど、トリックに支えられた誤魔化しの表現であり、作中のプロットの時間を操作しすり替えることによって、永杉や木山の客観的には自殺行為である「旗を立てる」(ピラをまく)行為を美化し、その敗北(死)に深見が慟哭することで、深見の転向が隠蔽されるという構造をもっていることが分かった。

右の引用で「作中のプロットの時間を操作しすり替える」とされているのは、永杉と羽山、木山の獄死に続いて深見が転向した過去が深見によって回想される《戦後》の部分と、作品最後の「仕方のない正しさ」を「しゃんと直さなければ」と深見が決意する《戦中》の部分とが、本来の時間軸からみれば入れ替わっていることである。小澤氏によれば、木山の死を慟哭する深見に共感した読者は「見事に『暗い絵』の持つ本質的な問題追究を避けてしまった野間宏の誤魔化しとトリックに引っかけたといつてよい」という。

そのアクロバチックなすり替えにより、一九四六年の文学的出発に当たって、野間宏は、戦中からの非転向派に好意的なポーズを取り、それには実際は同調しなかった自己の転向を曖昧化し隠蔽することで、一方では宮本百合子の好意的発言(新日本文学会第二回大会の一般報告)を得、一方では平野謙や本多秋五(近代文学派)の評価をかちとつたと言えるだろう。

右の引用の最後のところ、野間が平野謙や本多秋五からの評価を得たという指摘は、「象徴詩と革命運動」との「独創的な結合」に「野間の出発点」があると考えた平野の見解を指している²¹。平野によれば、野間は革命運動に参加したものの、「野間と「京大ケルン」の革命的學生との決定的な相違点は、フランス・サンボリスムを中心とする野間の「芸術による人間認識」という一点であった」とする²²。このような見方は、プロレタリア文学における政治の優位性が人間性軽視をもたらしていたとする《近代文学派》の基調に通じるものである。

政治主義、あるいは芸術主義のどちらに与するのか、学生時代の野間はその判断に苦慮していたというのが実情であろう。京都帝国大学文学部の学生であった一九三六年の日記には、「私は富士や桑原に対して、社会性(共産主義)をあげしうとき、併し、羽山さんに対しては、芸術の立場をまもる、態度をとっている。これは、二種の使い分けと考えるのか」(八月二六日)と

書いている。芸術側の友人富士正晴・桑原（竹之内）静雄と、政治側の同志羽山善治との間で、野間は決断をためらっていた。このためらいは、基本的にはこれ以後も克服されることがなかったと思われる。

そもそも野間が関わっていた学生運動が「革命運動」といえるものであったのか、それを疑問視する意見もある。永島や布施たちの日本共産党再建を目指すグループは、非法法舞台に踏み込んだ「革命運動」であつたといえるが、「学生評論」の活動に関しては、「終始一貫して、「文化の擁護」が学生の思想的自立の中心テーマとして提唱されていたし、安易な政治的プロパガンダの場所などではなかつた」とされるのである。実際に「学生評論」事件で一九三八年六月に検挙された藤谷俊雄は、「これらは戦争とファシズム下のインテリゲンチヤの抵抗であつたので、客観的には「革命運動」と評価されるようなものではなかつた」と指摘している。

『暗い絵』冒頭に紹介されるブリューゲルの絵画集から、深見進介は「奇妙な、正當さを欠いた、絶望的な快樂に伴うことと印象、そしてまた、そうした暗い快樂の深い穴の中で無益に呻きもがいているとも言えるような印象の集まり」を感じとっていた。深見が見入るブリューゲルの絵には、「爬虫類のような尾をつけた人間」「蛙の水かきの皮を五本の指にもつた人間」「ひとでのように幾本もの足を体中にはやしている人間」「人間の足をつけて歩いている魚」たちが描かれている。

「爬虫類のような尾をつけた人間」は、「股をひろげて腰を下し尖った口の中から汚れた唾液をはきかけている。その股のあいだには、やはりあの大地に開いていると同じ漏斗形の穴がぼかりと開いていて、その生殖器が、生殖器の言葉があるとすれば、その言葉でしゃべっている」ようにみえた。それはまるで「押しつぶされた生命がただどこか最後の一局部で生きている、こうした暗い不潔な醜い部分にのみ生きているのをその不潔な部分が羞恥している」ようだと表現されていた。

単なる空虚であるはずの穴が言葉を話している、去勢されたはずの生殖器が自我を代理して語っている矛盾のなかに異形の人間たちが棲息している。ブリューゲルは「当時の支配者スペイン王フィリップ二世の専制政治に対する嘲笑」を形象化したのだが、異様な生態は、絵画に見入る深見の心象が投影されたものでもあつた。

これらの化物を支えている精神の中には人間の矮小な姿の中に閉じこめられて燃えている深い愛があり、貧困に対する痛烈な憤怒がある。無智と愚昧と冷酷に対する反抗がある。そしてそれらが苦悩の上に強い姿となつて、烈しい形をとつて、姿を現わしている。そして、ここには群衆への、集団への、民衆への強い執着がある。人々は集団以外としては現われない。祭りの夜の、風景の中の点描としての、むれた蛙のような人間の集りとしての、髑髏をつけた人間

どもの群としての、犬をつれた獵人がかえって行く農村の
営みの中の人々の群れとしての、集団以外としてはあらわ
れない。そして、ここには民衆の最後の武器である笑いと
諷刺があるのである。

深見にとつて、ブリュエールの絵画に描かれた農民たちは、
革命運動に参加した学生グループの陰画であつた。木山に向
かつて深見は「俺はね、あの暗い厭な形をした穴が、あの当時
の、絶対専制政治下の人間の自由だつたんだと思うんやがね」
という。「あの穴が何か訴えたげにしながら言葉をもたない」
のは、それが限定的な自由でしかなかつたからで、「俺達の魂
そのものが、ちょうどあの当時の農民と同じようなあんな厭な
穴の形をしているんじゃあないかなあ」と続ける。

木山は、最も急進的な永杉でさえ「自分の絶対性が動いてい
ない」と感じていたことを打ち明け、永杉も「ブル・デモ（ブ
ルジョア・デモクラシー）の一員でしかない」と批判し、「奴は理解
力だよ、創造力じゃあないよ」とする。マルキシズムの革命的
な理論を理解し、党のテーゼを把握する才能を備えてはいるが、
それらを咀嚼したうえで自分たち学生にとつて本来あるべき運
動を導き出す能力は持ち合わせていないというのである。

彼らの行動は、「プチ・ブル」と労働者から蔑視されていた
知識人が自己存在を否定しようとする衝動に煽られたものでし
がなく、社会を根本的に変革するための絶対的な主体が形成さ

れていなかったために、「自己完成の追及の道」を革命運動に
つなげることができなかったと批判されているのである。『暗
い絵』には、深見が「資本論や労働者階級の状態など、こうい
う種類の書物を読みながら俺は何も知らないのだとその後もこ
の時のことを考えて思うことがあつた」とある。野間も学生時
代の日記に、「私にはプロレタリアートが感ぜられない、どう
してだ、どうしてだ」（一九三五年一〇月六日）、「私にはプロレタ
リアートがつかめていない」（二〇月二日）と焦燥感を書き残
していたのである。

野間自身を含む学生たちの強い自己否認の心性が《穴》のイ
メージに投射されていたと考えられる。精神分析の視点からみ
れば、「メランコリー者」には「この患者に固有の強い心的性
的緊張ないし興奮が生じ、それが患者の中にあふれて、ついに
は心の中に一種の穴があき、そこから絶えず心的エネルギー
ギーが、還元すればリビドーが流れ出る」²⁶。そして「実際の現
実と可能性を混同」するために、「メランコリーに特徴的な穴
のイメージが言説のレベルで強まると同時に、患者の心的組織
が固有の渦巻運動という反復的な局面をもつことが強調され
る」のだと分析される。²⁶ 革命運動家という自我理想（あるべき自
我）の絶対性によって否認された自我（実際の自我）の空虚感が
《穴》に投射されていたと考えられるのである。

5 戦中日記

米軍の大阪大空襲によって、ブリューゲルの絵画集は焼けてしまう。野間はその瞬間を印象的に描き出している。五七五文字を費やして書かれた長い一文のなかに、『暗い絵』の小説テーマが象徴化されて表現されている。

この写真版の絵画集が、油脂焼夷弾の飛び火を浴びて、綴り合わされた絵の一枚一枚が、流れる黒い液体のような炎の中に焦げてはがれながら燃えていった時、この絵の中のひとでのような人間、犬の顔をつけた人間、尾をつけた裸の人間、あの暗い爛れたような穴を大事そうに股の間にもっている人間達が大きな如何なる力をもつてしてもとどめない炎のあついほてりの中で、すでに紙の下に廻った小さい炎のために次々と火あぶりにされ、その汚い厭な正視し得ぬような肉体を焦がし、醜い体を火のためにさらに醜く瘡癩させるかのように歪めて、しばらくは燃えて行く紙の火の中に明らかな形で姿を現わし、焦げる紙の上にあぶり出しの字のように黒々と線をつけ、そしてやがてそれらの体も火となつて消えていった時、大阪全市は南の空から北の空へかけて、燃える炎であかあかと明らみ、急速な生命の危険をつたえる重い脅かすような響きを拡げなが

ら、空を押し渡る機械の嵐が、幾千という巨大な鈍い光を湛えた重い翼の幾重もの重なりが、炎の明るみの中に次第に大きな大阪市の全景をくつきり表わしてくる街の上に濛々とこめた火災を越えて過ぎ渡つてゆき、この空の中を押し移つてゆく、限らないモートルと大きな機械の重みに押しひしがれながら消えてゆく、奇怪な穴を持った人間共のうめきが、何処かその炎の中から聞こえたかも知れないのである。

ブリューゲルの絵画に描かれた異形の人たちのなかには、「尾をつけた裸の人間」「爬虫類のような尾をつけた人間」の姿が含まれていた。このような異形の人間のイメージの原型は、一九三五年一月七日の日記にみられる「人々はみな尾をたれている」という表現にあるのではないか。日記にはこの後、「すべてを生殖器にむすびつけて考える男。／＼君、これなら、何もつかめてないやないか。／＼そうか、Mだけつかめてるいうんやる」／＼「穴があいているのか、穴や、それが我や」という記述がある。「M」とは、野間が当時恋愛感情を抱き、性欲の亢進に悩まされることになる富士正晴の妹光子を指す。

一般的には、「尾」は男性の生殖器、「穴」は女性の生殖器の象徴とされる。男性である自分の身体に「穴」が開いているとするのは、孤独の感情、あるいはコンプレックスによる強烈な自己否定か、性欲の異常な亢進による性倒錯を意味するであろう。

翌三六年一月四日の日記には、「何かが、俺の中に穴をあけている」と書かれている。その日、煙草を吸った三人の女性が目の前を通り過ぎ、「猥な言葉」をかけ「性交」を申し込もうと思ったのだがそれをするのができなかった。「私の生殖器」を「下部」に感じながら「私は、なぜか、さびしかった。私をたたくもの、私をのがれざるもの。私を、それ（光子「君」が）、穴をあけることによつて、私のその状態を責めていたのだ」と記されている。野間にとつて光子は、自我を孤独におちいらせる存在であつたとともに、「私の、私の性慾をジュステイフィエンしてくれるもの。私はこれをはなさない」と、性欲動を備給 (Begabung) する対象でもあつた。《尾のある人間》のイメージの原型は、暗い性衝動を秘めた二〇歳の野間自身の姿であつたといえるのではないか。

一九四五年三月一三日深夜から一四日未明にかけての約三時間半、グアム米軍基地から飛来したB 29 二七四機が大阪市街地に焼夷弾を投下した。このときの主な標的は浪速区とされ、浪速区に隣接する西成区にも被害が及んだ。西成区北部はほぼ全焼、同区南部にも多くの着弾があつて全焼した地域があつた。野間が勤労課に勤務していた国光製鋼業株式会社は、西成区に所在していた。

その時、或る軍需工場の一部門の責任者の位置にあつた彼は特設防護団のいかめしい服装を着けて、この画集の置

かれている部屋に移つてゆく炎を地面に立てた長い鳶口に寄りかかるようにして、苦しげに眺めていが、すぐ消火作業のために団員を指揮する位置に走り去りながら、そのひとでのような足をもつた人間達が、暗い闇の中で燃え上り焼け焦げるのを思うと、彼の心の中を何か震えおののくような感情が走り、彼の顔は鉄帽の下で、ちょうどその絵の中の人間の焼け爛れてゆくときの苦しげな表情を、赤々と燃える火に映えて示したのである。

二四九文字を費やして書かれた右の一文には、深見の心境が描き出されている。ここで注意したいのは、このときの空襲によつて犠牲になつた大阪市民——三九八七名が死亡し、六七八名が行方不明になつた——を嘆くのではなく、画集のなかの「ひとでのような足をもつた人間達」が焼かれることに対する「震えおののくような感情」がクローズアップされていることである。そしてこの「震えおののくような感情」は、深見の顔が「苦しげな表情」を映じる以外、それを具体的に知る手がかりは示されていない。深見には、「街の金貸しと街の運動家」を「二つ並べて書いても少しも不思議ではない程どちらも哀れな汚れた存在」と感じられていた。「哀れな」革命学生集団の喩である「ひとでのような足をもつた人間達」が焼き尽くされることは、何を意味したのか。作品中には、大阪府庁の官吏を務める父親の「いたずらに徒党に与せざる方針を堅持されたし」とい

言葉が四回引用される。父の掟に背いたこと、さらには獄死した三人の友人を裏切つて転向した過去の自分に対する自己処罰の衝動が空襲の受苦に投影されていたと考えられるのである。

「赤にだけは、ならんように」と野間を戒めていたのは、母まつゑであつた。野間が一一歳のとき、肺炎をこじらせて父卯一が死去した。母はそれ以来、借家業や小規模な自営業をてがけ苦勞しながら家計を支えていた。一九三五年の日記によれば、「俺のお母さんは、この世の中へ苦しみきたにすぎないのだ。こうした、お母さんを苦しめるのは、俺だ」（六月七日）という一方、「私は、母の手から逃れて行かねばならない。母とはなれねばならない」（六月二四日）と逡巡する。それでも「母によく思われたい」野間は、母を裏切つて羽山と交わつていることに、「羽山さんが私を、うまうまと導き入れた、私を、とりこにし、つかみこんでいる。だましている」とさえ思うのであつた（八月七日）。『暗い絵』にも、父への反感とは対照的に、「五十年の苦境に堪えている」母への共感を、深見と木山が語り合うというシーンが描かれている。

母に対する気遣いから、学生時代の野間は左翼学生運動に没入できないために、羽山たち労働者との間に心理面で怪境があるのを感じていた。三五年七月二六日の日記には、「羽山氏が私をけいべつし、なにくそと思うこと。しかし、私がおくれているのは事実だ。はたらいているものは常に、がく生をけいべつしていること」とある。このような彼らとの距離感は、野間

がアナキストの新聞で「共産党リンチ事件」のことを知ると、極点にまで達する。

昨夜、羽山さんと、その同志に、私がリンチされる夢をみた。しかし、私は殺されなかつた。かえつて、刀（柄のない刀身に布をまいたもの）をうばつて、二人を殺してしまつた。母が私をかくしてくれたのだが、二人は私をみつけたのだ。私はきつた。こんな夢をみるとすれば、私は、左翼を重荷とかんじているのだ。きつと。（一九三五年二月一七日日記）

右の夢には、母の戒めと左翼学生運動との間で葛藤する野間の自我が表現されている。これと同種のアンビバレントな心情は、同じ三五年の六月二五日、それまで「先生」と呼んで敬慕していた竹内勝太郎が黒部峡谷で転落して遭難死したときにもみられた。同日の日記に、野間は「俺は、先生の束縛を、きゅうくつと思つていた。もうどうしていいかわからぬ程、先生が俺をとらえていた。俺は、身動きできなかった」と書く。そして「二十五日の夜、俺は、ここへかきつけることもできぬような、先生に対する恥ずべき心をいだいていた」とし、師と仰ぐ竹内に対して（その死を望んでいたともれるような）憎悪をひそかに抱いていたことを告白していた。愛憎相半ばする心理は、竹内——さらには羽山や布施たち——に象徴される理想自我が野

間の自我を圧迫していたことによるものであった。

さらに三五年一〇月三日の日記に、野間「マルキシズムを裏切った人々、弱さから。それが毎夜、自分を苦しめる。針で指をつく。そして、苦しめることをやめる。苦しめることは、自分を許すことだ。苦しめることは、たのしめ、少しでもゆるされることだ」と書いている。神経症患者において罪責感「疾患に満足を見いだしていたのであり（これは転移神経症の場合には「逆備給」と呼ばれている）、苦痛という罰を手放そうとしない」とされる。メランコリーの「コンプレックスは、あたかも開いた傷口のように、すべての場所から備給エネルギーを自分に集めるのであり、自我がまったく貧困になるまで、空っぽにしてしまう」のである。理想と否認のアンビバレンツのなかで野間の精神は、渦巻く《穴》を抱え込み、減圧されて真空におちいつてしまうのであった。『暗い絵』には、その様子がつぎのように難解な表現を使って描写されていた——「満ちふくれ、さらに渦巻いて来るような烈しい心の動きを感じた。しかしそれにもかかわらずその次第に激越な調子を帯びようとする心の動きが、心の内の深い部分で明らかに封鎖されているのを感じた。何ものかにこの自分の心の内を烈しいものを投げつけなければ生きていけない」——。

『暗い絵』の結末部分には、《やはり、仕方のない正しさではない。仕方のない正しさをもう一度真直ぐに、しゃんと直さなければならぬ。それが俺の役割だ。そしてこれは誰かがやら

なければならぬのだ》という深見の印象的な決意の言葉がおかれている。しかし深見がどのように生きてゆこうとしているのかは具体的に分からない。空襲と敗戦は、政治主義と芸術主義を兼ね備えた——小説家としての《第三の途》——戦後派作家としての出発のきっかけを野間に与えた。このことを考えれば、深見の言葉には、山道で木山と別れた一九三七年という作中時間ではなく作品が執筆された戦後、再出発を決意した作家野間の真意が託されていたといえるのではないか。

「敗戦で元気になった野間宏」に論及した笠井潔氏は、「本来なら、暗い絵であるブリュゲルの画集と同時に、作品『暗い絵』の構想もまた、作者の内部で消滅すべきものだった。それを延命させることで、あえて野間宏は作家として出発したのだが、それは暗い絵の帰結が明るい絵でしかありえない奇怪な倒錯をもたらしたのである」と指摘している。ブリュゲルの代表作は『死の勝利』(The Triumph of Death)であるが、深見が感じとった「暗い快楽の深い穴の中で無益に呻きもがいているとも言えるような印象の集まり」は、生と死、快楽と苦痛というアンビバレントな状態を意味していた。自己処罰の衝動が空襲の受苦に投影されていた一方、異形の人たちが焼かれるモチーフが描かれることよって、「その当時の思想運動と呼ばれる小さな哀れな動き」にまつわる記憶から、野間の自我がひそかに解き放たれることになったのではないか。そのことが、大作『青年の環』の「初発のモチーフ」が変化したとする栗原幸夫氏に

よって指摘された、「こうして抵抗が協力を頹落していった自分の経験を描くことから野間宏は撤退し、かつての『暗い絵』はいかがわしい「明るい絵」にとつて変わられました」という事態にもつながっていったのではないだろうか。

習作『車輪』は、野間が学生時代、芸術派の仲間と考えていた富士・桑原（竹之内）と一緒に創刊した同人誌『三人』第一一〜一三号（一九三五年二月、三六年五月、三七年一月）に掲載された。主人公の深見進介が「フロイド奴、フロイド奴」とつぶやくシーンがある——「フロイド奴、お前は、一体、それで、人間を解放したと思つてゐるのか」「お前は、お前はただ、穴を少しだけ、ほんの少しだけ掘げただけではないのか、しかし、それが穴であることにはやはりはないのだ」——。このセリフに関して瓜生忠夫は「野間が『暗い絵』で追究している方法は、フロイドのように単純で幼稚なものではなく、久保栄の生理学的方法をもこえている」と指摘した^①。

『車輪』の「フロイド奴、フロイド奴」というセリフが「ブルジョア奴、ブルジョア奴」に置き換えられた『暗い絵』の構成は、性衝動の暗さを告白することではなく、金力を誇示する「食堂の鼻親父」と父に対するコンプレックスで深見が葛藤するところに力点がおかれている。そのような変化に符合するのは、空襲によって焼かれたブリュッゲルの絵画から深見が読みとろうとしていたイメージが、性欲の亢進を抑制できない『自我』ではなく、「人々は集団以外としては現われない」とされ

るという『社会集団』『階級』の寓意であつたことである。懲罰欲求は無意識の罪責感に由来する衝動であるとされるが、野間は戦後派作家として出発するに際して、記憶の底に封じ込められていた無意識の罪責感を回帰させたのであつた。しかしそれは同時に、創作を通じて過去の記憶の再構成をおこなうことで自我の解放がもたらされるといふアンビバレントな状態におちいらせることになつたのである。

注 『暗い絵』の本文は、『野間宏全集』第一巻（一九六九年一〇月、筑摩書房）、野間の日記は『作家の戦中日記 一九三二―四五』上（二〇〇一年六月、藤原書店）に拠つた。

- (1) 小野義彦「学生無名戦士の思い出―永島孝雄のこと」、『学生評論』第四巻第五号、一九四七年九月、六一頁
- (2) 京都府労働経済研究所編『京都地方学生社会運動史』（一九五三年二月、京都府労働経済研究所、一七八―一七九頁）
- (3) 渡部徹編著『京都地方労働運動史（増補版）』（一九五九年一月、京都地方労働運動史編纂会、一五〇―九頁）
- (4) 本多秋五『暗い絵』と転向、『市民文庫』一九五三年八月、引用は『野間宏全集』第一巻（三五一頁）からおこなつた。

(5) 『近代日本社会運動史人物大事典』（一九九七年一月、日外アソシエーツ、六五九頁）

(6) 鶴見俊輔『第二篇の要約』（『改訂増補共同研究 転向』中、一九七八年四月、平凡社）

(7) 高島通敏『生産力理論―大河内一男・風早八十二』（『改訂増補共同研究 転向』中、一九七八年四月、平凡社、二〇五頁）、栗原幸夫『近代天皇制下の論理と倫理』（『現代の眼』第一八巻第一二号、一九九七年

六八頁)

- (8) 風早八十二『労働の理論と政策』(一九三八年一〇月、時潮社、一頁)
(9) 同右書、二六五頁。
(10) 中村福治『戦時下抵抗運動と「青年の環」』(一九八六年一〇月、部落問題研究所出版部、一八五頁)
(11) 前掲(7)『近代天皇制下の論理と倫理』、七三頁。
(12) 同右、七二〜七三頁。
(13) 小野義彦『昭和史』を生きて(一九八五年四月、三一書房、一九〇頁)
(14) デイミトロフ『ファシズムの攻勢と、ファシズムに反対し労働者階級の統一をめざす闘争における共産主義インタナショナルの任務―共産主義インタナショナル第七回大会における報告 一九三五年八月二日』(『反ファシズム統一戦線』坂井信義・村田陽一訳、大月書店国民文庫改訳版、一九六七年九月、六八〜七〇頁)
(15) 野間宏他『座談会わが文学、わが昭和史』(一九七三年八月、筑摩書房、一八一頁)
(16) 桶谷秀昭『戦後文学のゆくえ―野間宏の評価について―』(『新日本文学』第一八巻第一一〇号、一九六三年一〇月、六八頁)
(17) 同右、七〇頁。
(18) 小澤勝美『野間宏『暗い絵』論―戦後文学の出発点を捉え直す―』(『近代文学研究』第二七号、二〇一〇年四月、二八頁)
(19) 同右、三八頁。
(20) 同右、二八頁。
(21) 平野謙『暗い絵』の時代的背景』、『暗い絵・崩壊感覚』『解説』、一九五五年四月、新潮文庫)、引用は前掲『野間宏全集』第一巻(三三四頁)からおこなった。
(22) 同右、三四六頁。
(23) 郡定也『京都学生文化運動の問題―「学生評論」の場合―』(『戦時下抵抗の研究―キリスト者・自由主義者の場合』、一九六八年一月、みず書房、三二七頁)

野間宏「暗い絵」と『第三の途』

- (24) 藤谷俊雄『小説と歴史的事実』上(赤旗)一九七一年九月一〇日)
(25) P・コフマン編『フロイト&ラカン事典』(佐々木孝次監訳、一九九七年一月、弘文堂、三五二頁)
(26) 同右、三五二〜三五三頁。
(27) フロイト『自我とエス』(竹田青嗣編『S・フロイト自我論集』、中山元訳、ちくま学芸文庫、一九九六年六月、二五八頁)
(28) フロイト『喪とメラソコリー』(『人はなぜ戦争をするのか』、中山元訳、二〇〇八年二月、光文社古典新訳文庫、二二二頁)
(29) 笠井潔『過激主義の運命』、『文藝』編集部編『追悼野間宏』、河出書房新社、一九九一年五月、一九七頁)
(30) 栗原幸夫『キムチヨンミさんに答える』(季刊『とび』)第九七号、一九九四年十二月、九〇頁)。さらに紅野謙介氏が『暗い絵』がブリューゲルの「奇妙な、正當さを欠いた、絶望的な快樂に伴うがごとき印象」に始まりながら、身内を描いても他者の存在はその外延がなぞられるにとどまったことでも推測できよう」と指摘していることも、これと同じ問題をとらえていると考えられる(『近代日本文学におけるブリューゲル・素描』、『日本大学人文科学研究所紀要』第三八号、一九九三年三月、七〇頁)。
(31) 瓜生忠夫『車輪』から『暗い絵』への野間(『野間宏全集』、『月報』1、一九六九年一〇月、三頁)

「おにし やすみつ 本学教員」